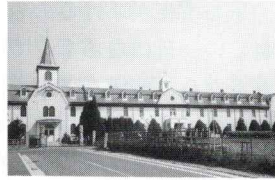


北辰

TOKYO

岐阜県立多治見北高等学校同窓会

東京支部会報 創刊第6号



平成5年5月1日

発行人 鈴木 満

遠く美濃路よりの発信 大角 敏男

東京支部同窓会からゲストとしての案内状を頂いた時は、さすがに嬉しく遠慮することも忘れて、早速に出席の返事を出したものでした。いずれの高等学校も創立50周年を迎える頃は、同窓会設立の気運が高まって来るのが常識です。北高は30年の齢いを数えるまでになり、伝統ある学校の仲間入りをしても良い程に成長しました。

何人かの卒業生に、そんなことを打診してみると意外に反応があり、その要望も強く感じられました。その中の一人から、一回生の鈴木満君が公正取引委員会に在職中であることを聞き出しました。同君の迷惑も考えず強引に彼の所へお邪魔をして、ことの趣旨と賛同についてお願いをした次第です。

そんな鈴木君からの案内状に「先生が仕掛け人だから、発会式にどうぞ」の追文には、いささか驚かされました。まさに教師冥利に尽きる想いと感激をしたものです。

支部の発足当初は、有志約20人程だったと聞いています。そのメンバー達が東京周辺に在住する卒業生の住所や勤務先などを、北高同窓会本部の名簿をもとに訪ね歩いたということです。そして約900人の宛先を探し当て、組織づくりに成功されたことは本当に立派なものでした。

今日では、理事会の役員（企画部会、事務局、名簿部会、会報部会）が50余人、回期役員（本



総会での大角先生(写真左)

年度は、4回生、14回生、24回生、34回生の年次持ち回りの総会幹事）が30余人の皆さんで支部が運営されており、すでに会員数は500人程度に達したことを聞き及んでおります。その間の役員会、理事会の開催など大変にご苦労が多かったことと思います。

同窓会は、心の故郷でもあり、上京して東京で生活している同窓生にとっては、申し分のない交流の場であり、友情を温め合う会とも考えられます。総会などは、どこの同窓会でも同じ様なものですが、東京支部で特筆されるのがカルチャー・フォーラムです。毎回フォーラムの内容が変わり、そのゲストは同窓生が買って出て演出（出演料はロハ）するのが定めとか。同窓生には人材も多く、仲々ユニークな手法を考えついたものです。

毎回総会のパーティーが終るや卒業年次毎の同級生が二次会へと繰り出し、上京当時の思い出話や入社当時の苦労話、さらにはそれぞれの故郷などの話が交わされ、思わず夜がふけるのも忘れる程、話に花が咲く楽しい一日になるそうです。

人は目的もさまざまなら、気質もさまざまです。こういう機会でもなければめったに親しくなれるものではありません。そういう意味でも、先輩や

後輩が一堂に会して話し合えることは、極めて貴重であり、実に得がたい同窓会だと思います。

どうぞ、これからも同窓生の輪を拡げ、その輪をいつまでも絶やすことなく、親睦と友情の輪をさらに大きくし、多治見北高校の同窓会を立派に育ててもらいたいものです。

最後に、東京支部同窓会の発展と在京の同窓生諸君のご健勝を念じつつ擱筆いたします。

ウィンブルドン春物語

可児 勝 (1回生・三菱油化勤務・前多治見北高同窓会長)

“ウィンブルドンに引っ越しました。”というテーマが大学時代に通った英会話学校の教科書にあった。ロンドン郊外にあって、緑が多く、とても静かで落ちついたすばらしいところと書いてあった。

ウィンブルドンは、人口約800万人のロンドン市(英国)を東西に流れるテムズ河の南側で、市の南西部にある。

今、そのウィンブルドンに住んでいる。ウィンブルドンは30年前の当時と恐らく余り変わらないであろう。

わが家に面してウィンブルドン公園がある。その公園には、約20面のテニス・コートが2つ、ゴルフ場、約10個のサッカー場、クリケット場、ヨットのできる湖、その他があり、市民憩いの場である。そして、3つのゴルフ場、迷ったら出てこれないと言われている森林地帯を含む巨大な公園、ウィンブルドン・コモンも近くにある。わが家には種々の鳥は勿論、“りす”が毎日訪れる。

“りす”は可愛い仕種で庭を動き回る。

ウィンブルドンは、ロンドン市内ではあるが、緑が多く、むしろ、イギリス人の大好きな田園の趣である。

わが家から、市の中心、セント・ポール大聖堂の近くにある三菱油化(株)ロンドン事務所へは地下鉄で1時間弱の近さである。

かかる静けさもウィンブルドン・テニス・シーズンの2週間は一変する。数万人の観客が押し掛けるからである。静かな佇まいの所にもかかわらず、自家用車でのお越しはご遠慮ください、とは言わない。車乗り入れ大歓迎である。普段は原則として路上駐車可能であるが、この期間だけは路

上駐車全面禁止となる。その代わり、近くのゴルフ場、サッカー場、公園が忽ち大駐車場に早変わりする。さすが、自動車先進国である。

わが家の前の道路(ウィンブルドン・パーク通り)にはウィンブルドン・テニス・マークのTシャツ、シューズ、ボール等々のみやげ物屋が店を開く。ウィンブルドン・テニスはわが家から徒歩約5分のところにある全英テニス・クラブ(正式名称は、The All England Lawn Tennis & Croquet Clubである)で開催される。この全英テニス・クラブと道路を一つ隔てた反対側にあるウィンブルドン・テニス・クラブ(正式名称は、The Wimbledon Club〈Wimbledon cricket, lawn tennis & hockey clubs and squash club〉である)に私は所属している。ウィンブルドン・テニス・シーズンには、多くの女性プロが我がテニス・クラブに練習に来る。ある日、ナブラチロア(米)が小柄な選手と練習試合をやっていた。

勿論、自分のプレイをやめた。邪魔にならないように、かつ、間近で観戦することとした。小柄な選手もなかなかやる。ナブラチロアの豪速球サービスをいつものように前に出てくる彼女の足元へもの見事に打ち返していた。日本女子No.1の伊達選手であった。シーソー・ゲームをはからずも楽しむ事が出来た。惜しくも最後はナブラチロアが勝った。

ウィンブルドン・テニスの切符はなかなか手に入らない。一家に一枚だけ権利のある申込用紙を入手し、前年末までに、全英テニス・クラブへ送付する。籤により、当たったら切符を購入できる。よって、こんなに近くにいながらテレビ観戦となる。過去4年間で1回だけ当たった。1992年6月、

センター・コートである。日程をやりくりして観戦した。

ゴルフ場も上述のように近くにある。東京近郊でゴルフを楽しんでおられる諸兄には目の毒になるようなことを書く。

ある夏の日、8時頃ゆっくり起床し、空を見る。晴れていたら、ゴルフ場へ電話し、13:30頃のTee-offを予約する。午前中、空いているので、テニスを楽しむ。昼食を食べ、13:00頃家を出る。18holesのゴルフを充分に楽しみ(3-4hrsで完了する)家でゆっくり夕食を取る。

東京近郊のゴルフ・プレイヤー諸兄、余り羨ましがする事はない。上記はある(特別な)夏の日である。日照時間が極端に短い冬は、ゴルフもままならぬ。春と秋は私にとってシーズン・オフである。私の責任範囲(全ヨーロッパ〈CIS、東欧を含む〉、中近東、アフリカ)ではいつも数件以上の

業務が同時並行的に進展している。日本からの出張者も多い。各国へのお出張また出張である。土、日も休ませてはくれない。週1~3回の出張となる。幸いにヒースロー空港はわが家から地下鉄で約1時間の近さである。

今年のお家が家の桜は、1月中旬頃に咲き始めた。2月末の現在も咲いている。例年2カ月間位、咲きつづける。東京近辺では約10日間位だったと思う。

当地では“花の命は長い”。これから、ウインブルドンも春を迎える。水仙やクロッカスの花が一面に咲きほころびる美しい季節になる。“花の命の長さ”を楽しむ事ができる。ウインブルドンは私の仕事のベース・キャンプである。ここでの生活で私の心は和む。

(1993年2月、ウインブルドン〈英国〉にて)

内津峠

齊藤 明 (3回生・長崎屋勤務)

私が多治見北高等学校に入学したのは1960年(昭和35年)である。当時の北高は、東濃一の進学高校を目指して設立されたばかりの学校で、私達の学年が入学したことによって、やっと三学年が揃うという程の新設校であった。実を言うと私は勉強が嫌いだったので、北高を受験することにあまり気が進まなかったのだが、厳格な父の方針に逆らい切れず、結局北高を受験し、入学するハメになってしまった。

授業のレベルは予想以上に高く、スピードも速かった。しっかり予習・復習をしておかないと、たちまちおいてゆかれる。そのことは分かっているのだが、元来勉強が嫌いな上、気の進まない入学をしたという気持ちもあって正面から立ち向かおうという意欲が起きず、学校のペースに自分を乗せる努力ができない。おいてゆかれる不安もあるので時々是一所懸命やってみるのだが長続きはせず、じきに飽きて遊びに出掛けてしまう。落ちこぼれに向かって進んでいるようなものであった。

入学して3ヵ月もたたないうちに、私はついに耐えられなくなり、授業をサボる決心をした。北高をやめるにしろ続けるにしろ、サボるという行



淡雪の院

動に出ることによって何か自分なりの答えが発見できるような気がした。そのことを親友にだけ打ち明け、ついでに誘いを掛けた。何日かが過ぎ、ついに決行の日が来た。自転車通学をしていた私は、その朝カバンの中に弁当と絵の道具だけを入れ、親には無論内緒で、いつもと同じように家を出て親友の家へ寄った。しかし彼は同行の意志をなくしていたので、やむを得ず一人でサボることにした。行くあてはなかったが、取り敢えず国道19号に出て名古屋に向かった。多治見の市街を出ると間もなく内津峠という山坂がある。今は道幅も広がっていて、車でアツという間に通り過ぎてしまうが、当時はつづら折りの急坂が続く難所で、ここを自転車で越えるのはかなり大変なことであった。幸い自転車通学で足腰は鍛えられており、15歳という若さの勢いもあって、私はこの峠を越えることにさほどの苦勞を感じなかった。それよりもこの峠を越えることによって束縛から逃れられるような解放感があり、気分は上々であった。

名古屋市内を通過したのは午前9時頃だったろうか。私は国道1号を上りに進路をとった。2時間ほどで岡崎市に入り、午前11時頃に岡崎城公園に着いた。初めて見る大きな花時計がとてもきれいで、しばらく見とれていた。お昼までにはまだ少し時間があったので、更に小一時間ほど自転車走らせた。岡崎の街並みを抜け、広々とした田園や森や丘陵が望める辺りで弁当にした。本宿という所であった。ポカポカと暖かく、青空の下でピクニックのようにノンビリとした気分での昼食であった。食事が終わると辺りの風景をスケッチした。時計はすでに午後2時を回っていた。岡崎城公園や昼食で消費した時間を差し引いて、ここまで来るのに要した時間を計算すると4時間半程かかっていることになる。そろそろ帰途に着かないと家に到着する時刻が遅くなり、親に疑いを持たれる危険がある。そう判断すると私は空の弁当箱と絵の道具をカバンに戻し、荷台にくくり付けると、帰路についた。

朝来た道を逆にたどって、岡崎、知立を通り、名古屋を抜け、春日井を過ぎて、やがて内津峠に差しかかった。家へ帰るための最後の関所である。私は長い登り坂に再びアタックした。空が茜色に

染まり、やがて山の景色が夕暮れの中に色彩と輪郭を失い始めると、急速に闇の気配が近づいて来た。朝、この峠を越えて行った時の、スリルと自由と反逆精神をごちゃまぜにしたような元気さは何処へやら、今は夜に追われ、一人ぼっちで山越えをしなければならない心細さと寂しさが、私の胸の中に黒雲のように広がって来た。山肌の森林や沢を包んでゆく闇のベールに捕まらないようにと、ライトを照らし、必死でペダルをこいだ。破裂しそうな心臓の苦しさ、足の耐えがたい疲労感に喘ぎながらやっとの思いで峠を登り切った。前方に明かりの灯る街並みが見えてくると、早く安堵感に浸りたくて、私の心は一層あせった。そして遂に家に帰り着いた。顔を洗い、なにくわぬ態度で中に入った。夕飯の時、父母は普段と変わらず、コトはバレていないようであった。後ろ向きではあるが、私なりの行動の一日が終わった。

翌日から私は北高に戻り、以後卒業まで2度と授業をサボることはしなかった。そして新しい目標を部活におき、3年間を燃焼させた。

あれからすでに33年が過ぎた。

内津峠は、私にとって青春の峠のひとつであったと、今、思っている。

同窓会やっています

可児俊信(19回生・明治生命勤務)

3月20日の春分の日、東京周辺に在住する2回目の19回生同窓会が開催されました。所在が判明している35名中、9名のOB、OGが集いました。

千葉県成田市、袖ヶ浦市、神奈川県藤沢市などからも、遠路のご参加をいただきました。ちなみに成田市は都心から約60km、これは多治見市から常滑市までに相当する距離です。ご苦労様でした。

会は、参加者の近況を確かめあった後、今回不参加になった方々の消息、はては在校時代の思い出にいたるまで、様々な話題に花が咲きました。東京で就職した方のほか、人事異動でこちらにいる方、ご主人の転勤でこちらに来られた方もあり、巡り合いの縁を感じます。

行事のたてこむ年度末のため、不本意にも欠席

となった方も多く、「次回は是非出席します」、「また連絡ください。皆さんによろしく」という言伝でもたくさんいただきました。

次回からは在京同窓会名簿をより充実させ、より多くの同窓生を集めてにぎやかな会にしたいと思います。

お知らせとお願い

《その①》今年は11月20日、港区芝の弥生会館にて第4回・東京支部総会が行われますが、多くの皆さんの参加をお待ちしています。

《その②》会員の皆さんの住所、勤務先、電話番号など、名簿に記載されている内容が間違っていたり変更になった場合、事務局にハガキまたは電話でお知らせ下さい。

▶ 事務局 東京都目黒区中根1-3-1 住友銀行都立大学前ビル6F(株)ゼロップ内(代表/三回生 国光正憲)TEL(3725)7061(担当・高見)